



【ヘルスケアイノベーション】

世界ヘルスケアレポートの論点と考察III

「健康は continuum」の視点で 世界経済フォーラムと Demos Helsinki のレポートを考える

世界経済フォーラムと Demos Helsinki を読み比べると、両者には際立った共通点と相違点があります。相違点は、両組織の視座の違いからきています。健康は continuum（連続体）という健康の本質に立って読み比べると、両レポートの変革を統合して、AI を擁するデジタルヘルスにより日常から医療に連続するヘルスケアを生み出していく必要性が見えてきます。

2024 年 9 月



世界経済フォーラムと Demos Helsinki の共通点

世界経済フォーラムと Demos Helsinki の2つのレポートには共通点があります。主なものは次の3点です。

1. 世界人口の高齢化による医療システムへの負荷増大の解決を目指している
2. デジタルテクノロジーを活用してヘルスケアを変える
3. 人間中心（患者中心）のヘルスケアへ転換させる

世界人口の高齢化が進む中で、心血管系疾患や糖尿病など慢性疾患の罹病増加が予想され、医療コストの増大と医療システムへの負荷が高まり、現在の医療システムでは耐えきれないという危機感が世界的に共有されています。その解決のために、ヘルスケアシステムの変革が必要と考えられています。そのなかで、いくつかのヘルスケアシステム変革に関する提言的レポートが出されていますが、共通するのは、デジタルテクノロジーの活用に活路を見出していることです。

インターネットは、さまざまなサービスが人間中心に設計されるようになりました。個人が自由に簡単に体験できるサービスが受け入れられ勝ち残る世界を生み出しました。これと同じように、ヘルスケアシステムにデジタルトランスフォーメーションが進むことで、医師中心あるいは医療サービス中心の伝統的なヘルスケアから人間中心（医療の場合は患者中心）のヘルスケアにシフトさせることができる可能性を見据えている点が共通しています。一方で、このヘルスケアトランスフォーメーションに関する2つのレポートは視座が異なります。

世界経済フォーラムと Demos Helsinki の違い

2つのレポートは次のような対照的な違いがあります。その違いを理解すると、それぞれのレポートの本質

がより明確になります。

1. ヘルスケアのメインステージが異なる

- **世界経済フォーラム**：伝統的な医療を中心とするヘルスケアトランスフォーメーション
- **Demos Helsinki**：個人の日常生活とコミュニティーを中心とするヘルスケアトランスフォーメーション

2. 変革動力が異なる

- **世界経済フォーラム**：官民のステークホルダーの協業
- **Demos Helsinki**：個人が健康に良い選択をできる能力を育てる社会のしくみ

メインステージの違いは異なる視座による

これらの違いは、世界経済フォーラムと Demos Helsinki の視座の違いが関係しているためと思います。世界経済フォーラムは、世界中の政府、企業、学術機関、非営利団体などのリーダーが一堂に会する場を提供することで、広範な影響力を持っています。グローバルな課題に対して、官民のセクターが協力して取り組むための枠組みを提供します。これは、現存するステークホルダーの意見をまとめ、現実的で総体的な課題解決を図る場とすることになります。このため、ヘルスケア変革は、まず現存する伝統的な医療システムをどう変革していくかにフォーカスされ、Demos Helsinki が説くまだ存在していない、ゆえに明確なステークホルダーが存在していない日常のヘルスケア中心の新しいヘルスケアコンセプトはレポートに含まれなかったのでしょうか。

一方、Demos Helsinki は、フィンランドに拠点を置く独立したシンクタンクで、持続可能な未来のためのイノベーションと社会変革を促進することを使命としています。特に、未来志向の調査や実験的なプロジェクトを

通じて、新しいアイデアや実践を生み出し、政策立案者やビジネス、市民社会と協力しています。この Demos Helsinki の未来的な視座は、伝統的な医療を超えて、未来のための新しいヘルスケアの枠組みを生み出すことにフォーカスを置いています。フィンランドという福祉制度が充実し、国民の健康に対する意識が高いからこそ可能と思われる「市民の市民による市民のためのヘルスケアシステム」ともいうべき突き抜けたヘルスケアの未来像が提示されています。

変革動力の違いも異なる視座による

世界経済フォーラムの視点は、世界の政府、企業、学術機関、非営利団体などのリーダーのコラボレーション促進による「**トップダウン変革**」と言えます。すでに世界のあちこちで特定の分野で成功しているが、医療全体に普及していないデジタルヘルスを医療の本流にするためには、各ステークホルダーの協業が求められる段階に来ており、世界経済フォーラムが官民のパートナーシップの構築と協力の促進を行うとしています。官民のステークホルダーの協業が動力となるトップダウンのヘルスケア変革です。

一方、Demos Helsinki は、健康とは何か？病気はどこから生まれるのか？という本質的な問いからヘルスケアを考えています。その答えが、**日常生活における個人の選択**です。そして、健康に良い選択をするために、能力育成が必要と説きます。ヘルスケア変革の中心が個人の選択の変革にあるという視点は、世界経済フォーラムと対極にあるとも言えます。この個人の意識や能力を変え良い選択をできるようにデジタル技術を活用すること、個人を取り巻くコミュニティー、職場、学校などの環境を変えていくことの重要性を強調しています。そして、それが簡単ではないためでしょうか？4つの変革シナリオを提案しています。そのなかで、「Democracy of the Fittest」と「Open Health」はボトムアップのヘルスケア未来像が描かれています。一方、「New Nordic Model」と「Hero Doctors」は、トップダウン式のヘル

スケアを描いていますが、個人が健康になれる選択と能力を高められる社会に変えていく視点は同じです。

健康という Continuum のなかで両レポートを捉える

どちらの視点が良いかという議論には意味はありません。むしろ、デジタル技術を用いた伝統的な医療の変革と日常の個人主体のヘルスケア創生はどちらも必要と言うべきでしょう。むしろ、連続して統合すべきであり、両者は高め合うことが期待できます。個人が日常生活で心身の自己管理能力を高め日常から心身のデータをモニタリングできれば、伝統的な医療は効率と効果を高めることができます。しかし、どちらのレポートも、片方だけにフォーカスを当てすぎていて、未来のヘルスケア全体像が見えにくくなっているように感じます。

2つのメインステージがつながる、あるいは統合されるための鍵は、どちらのレポートもデジタル技術を変革の鍵として考えていることにあります。デジタル社会では、人々はネットでつながり、あらゆるデータはクラウド上にデジタルデータとして保管可能で、必要な時に使えるようになります。この IT 時代の新しい能力自体が、次のようなヘルスケアの本質を具現化できるポテンシャルを有します。ヘルスケアの本質が具現化されると、ヘルスケアは伝統的な医療の垣根を超えて、驚くべきパワーを持ちます。日常から医療に連続するヘルスケアの誕生です。

Continuum

人の健康状態やその浮沈による病気発症は生まれたときから死ぬまで一人一人連続したものです。日本語ではなじみが少ない言葉ですが、まさに"Continuum (連続体)"であります。伝統的な医療は、原則的に病気になったときだけ、心身の状態を調べ治療します。車の修理と何ら変わりがありません。診療記録の義務付けられた保管期間も有限です。日本では診療記録は5年、自動車修理記録は3年。つまり、伝統的な医療は、人の健康状態

を連続して見るができない仕組みになっています。これに対して、デジタル技術を用いるヘルスケアは、次の Connectivity さえ担保すれば、一人一人の心身のデータは生まれたときから死ぬまでクラウド上に蓄積されます。異なる診療科のデータも一か所に集積されます。Demos Helsinki が言うところの自宅や職場での心身のモニタリングデータも、医療のデータとともに記録されます。あとは、一人の人の全データを統合的に把握し、分析し、活用する AI が誕生すれば、人の健康という Continuum は、包括的に管理することが可能になります。

Connectivity

現在のヘルスケアは、一人のデータは、診療科ごとに保管され、検診データは紙ベースで本人と検診センターが保管します。同じ診療科でも、クリニックを変えるとデータは途絶えます。このように、これまでのヘルスケアは、貴重な個人の健康情報データに互換性がなく、バラバラに存在し、統合的に用いることが難しかったのです。人の健康という Continuum を包括的に管理するには、異なる検査機器で取得したデータや、別の医師が行った診察情報の互換性が鍵となります。これが、Connectivity です。Connectivity は、世界経済フォーラムが医療変革に必要な要素の1つとして強調しています。資本主義社会で検査機器を一つに統一するのは困難ですし、医師はロボットではありませんので一人一人異なる診察になることを考慮すると、Connectivity を可能にする AI 技術が発展する必要があります。

Data

Connectivity が可能になると、生まれたときから現在までのあらゆる健康情報が同じところに蓄積され、現在の健康管理に活用できます。高齢になるほど受診する医療機関は増加し診療データは膨大になります。量だけではなく、罹患する病気の種類も増えます。従来の医師が診察室で診察するというスタイルでは、この複雑で大きなデータをすべて把握して活用することは容易なことでは

ありません。そして、未来では、自宅や職場でもモニタリングデータが加わります。Continuum である健康に関する情報は複雑で膨大にならざるを得ません。しかし、これは言い換えると、データが多岐にわたり膨大になるほど、その人の真の健康状態に迫れるということになります。本来、そうあるべきなのですが、単に技術的に、マンパワーの制約的にできなかっただけです。技術的には可能になりましたし、医師のマンパワーの制約は、AI がカバーできるようになるでしょう。そして、この個人の連続したデータが、個人間でも共有可能になれば、何億何十億人のデータが集積され、さまざまな医学の加速的な進歩を導き、病気の予防がヘルスケアの中心となっていくでしょう。ただ、この実現には個人情報のセキュリティという重要な課題を解決する必要があることを付け加えます。

健康という Continuum に向かい合う真のヘルスケアをめざして

2つのレポートを読むことで、人類がデジタル技術と AI を得たことで、ヘルスケアの効率と効果を向上させるだけでなく、ヘルスケアの理想に近づく変革が可能であると感じさせてくれました。医師単位あるいは医療機関単位で行われてきた閉ざされた医療が、患者データを共有する患者主体のオープンな医療へと変革することが可能です。デジタル技術と AI は、日常生活におけるヘルスケアを創出する力があることが分かりました。真のヘルスケアは、医療現場にのみあるものではなく、日常生活にこそ存在しますが、伝統的な医療は日常生活にまで十分なケアを及ぼすことが叶いませんでした。世界経済フォーラムと Demos Helsinki は、それぞれ伝統的医療と日常生活にフォーカスを置いてヘルスケアトランスフォーメーションを説いていますが、どちらも重要であり、健康という Continuum の部分を成しています。今後のデジタル技術と AI の進歩は、日常と医療が情報を共有して連携し、健康という Continuum と向かい合う理想のヘルスケアを生み出す可能性を秘めます。Demos Helsinki が用いたバックキャスト法にお

いては、未来像の質が極めて重要とされます。Health Continuum に向かい合うヘルスケアを、その未来像に抱き、社会のしくみを徐々に変えていく必要があると我々は考えます。



著者について：板谷 正紀（President, Personal General Practitioner、東京）